

.....
.....
' 09年5月1日付け 「台湾原住民族との交流会」メール会員の皆様、

●黄智慧さん寄稿

4/5に放映されたNHKスペシャルについて、台北の黄 智慧さんより、当会会員宛にご寄稿いただきましたので、ご紹介します。

----- 以下 -----

NHK スペシャル シリーズ JAPAN デビュー 第1回 「アジアの一等国」について

先日、NHK総合で放送されたNHK スペシャル シリーズ JAPAN デビュー 第1回 「アジアの一等国」の放送内容につ

いて、視聴者として納得できない、または違和感を持つ部分がありました。これは台湾人である私一人が感じたものではなく、台湾を深く知る湾生（戦前台湾で生まれ育った日本人）の方、そして台湾の大学院に留学している若い日本人にも共通した感想です。

以下それぞれの感想をまとめてみましたのでご参考になればと思います。

(I)

湾生であるAさんは以下のように感想を述べられています。

NHKの番組が視られて良かったです。でも内容はあのフランスの歴史学者の影響もあるのか、納得できるものではありませんでした。

私の母校である台北一中も執拗に何度も出てきますが、肩身の狭い思いでした。

いつもは日本時代を好意的に捉えてくださる柯徳三台湾麗正会長さんさえも、NHKの手に掛かると、われわれ後輩が自分の耳を疑うようなご発言しか取り上げないのです。

NHKという視聴者の放送受信料で経営する公共メディアの近年の反日ぶりは、目に余るものがありますね。

愚妻は今後はNHKにお金は払いたくないと言っています。

昨日集まった湾生の皆さんがこの番組を如何に批判的に見られたか想像出来ます。

日本では、湾生の皆さんはNHKの偏向した編集に気付くだらうけれど、一般の日本人が誤解しなければいいと懸念しています。

(II)

また台湾の国立大学大学院に留学中の日本人、Bさんは以下のような感想を語っています。

番組を見て思ったのは、普段台湾で耳にする日本に対する印象とは全然違うものだったということです。そう思うのは私だけだろうかと思っていたら、遅く帰ってきて最後の15分間だけ見ていた私の日本人の友人も、5分ぐらい見ながら「普段台湾の人が

ら受ける印象とは違いますね」と言っていました。

もちろん、台湾人の習慣から考えると日本人の私たちに対して「日本統治はとにかくひどい」と直接いう台湾人（とくにお年寄り）はいないと思いますが・・・。

今までNHKの番組は内容が優れていて面白いと思っていましたが、今回の番組は統治の悪い面ももちろんありますが、良いことまたは評価できること、さらには今後参考に出来るようなこともあるはずなのに、それには全くふれていませんでした。

また、現在の価値観で過去を批判するのも、どうだろうかと思いました。未来に生かすつもりなら統治で起こった問題の原因になった価値観についても考えるべきではないかと思います。

またどうせ批判をするなら台湾人軍夫に対する「補償金」や貯金の処理など、これからも解決の余地が問題について触れて欲しかったです。個人的に高砂義勇隊に全く触れられていなかったのも不可思議だと思います。

唯一、台湾では割と一般的な見方だと思ったのが最後の「日本に見捨てられた」という言い方だと思います。

(III)

以下は私からです。

私は長年、台湾において台湾の日本統治時代と台湾のポストコロニアル状況について、台湾のそれぞれのエスニック集団の日本観や日本統治に対する評価、湾生の方々の台湾に対する思いなどを聞き取り調査し、研究してまいりました。私はこの番組にはたった二枚の写真から植民地を評価をしようという企画者側の意図があり、それが無謀というか、何か結論ありきのような感じがして、バランスが取れた番組とは言えないと思います。

あの大の親日家の柯徳三さんが何か日本批判ばかりしゃべっていました。あるいは、その部分だけNHKが取り上げたのかとも思います。また改姓名は、朝鮮のように全員に強制されたような説明が番組ではなされていましたが、実際はそうではありませんでした。台湾史の研究者も朝鮮では80%を超えていた創始改名が、台湾では1943年の段階でわずか2.6%、その後の増加を考慮しても朝鮮の割合にははるかに及ばないことを指摘しています（近藤正己1996『総力戦と台湾 日本植民地崩壊の研究』刀水書房を参照）。そして何よりも、戦後生まれの台湾人の名前をみればお分かりになるかと思いますが、たとえば文雄、春男、千恵、美恵といった名前をよく見かけます。原住民族のなかでもヘイタイ、ボウヤが名前になっています。日本が去った後も自ら子供に日本的な名前をつけているのは、なにを意味しているのでしょうか？またつい最近4月21日に屏東来義郷パイワン族の村では日本人の銅像が新たに建てられました。村で地下水ダムを作った鳥居信平の功績を称えるためです。これはなにを意味しているのでしょうか？

番組では「日本統治がいやです」という声ばかり取り上げられていましたが、今ま

で何人もの台湾人が「私は日本精神ですよ」と言うのを聞いてきた研究者の私は、なぜこれだけがとりあげられたのか不思議に思いました。

最後に救いになっているのが、「台湾人を敵の手に渡した」という台詞が出てよかったと思います。そして、捨てられた台湾元日本兵の思いも伝えてくれました。しかし、これは明らかに戦後の日本政府に対して発した不満であって、戦前の日本政府に対して発したものではありません。番組は戦前の日本政府の反省を視聴者に促すために、元日本兵が教育勅語をいまでも暗誦し、軍歌をいまでも歌い続けていることがいかにも可笑しいあるいはいかにも「戦前の日本政府のせいだ」と映し出さんばかりで、肝心の「殖民後」の日本政府の態度、つまり「アジアの一等国」の後ろ姿にまったく触れようとしないのが真に残念でした。

戦後日本の思想界が戦前を強く批判し、猛省をしている姿勢はよく理解できます。だが、私たち台湾にいるひとびとからみれば、それは日本の国内事情です。またそのためには、植民地の過去とその後、今や異国となって久しい土地の歴史を勉強しようともせず、とにかく現地のひとびとの声を利用するのがてっとり早いという発想はいかがなものでしょうか。このような日本の戦後反省は「自己満足型」の反省であり、果たしてこれでいいのでしょうか。旧植民地にいた台湾人の「あの戦争」についての反省は、独自の角度があり、またあつてしかるべきです。それは最初から動機、役割、責任分担も違うし、なぜ日本人と同じように反省をさせられなければならないのか、これについては日本の戦後の思想界が考えたこともなく、実際、無関心なのです。そして、現実には、台湾人の声は戦後やってきた中華民国の体制によって長きに亘り抑えられてきました。外省人のもたらした「抗日」の日本観しか表に出すことができませんでした。やっと1987年戒厳令が解除されたのち、台湾の元殖民される側の声が、怒涛のように自伝や短歌、回想録などとなって出回るようになりました。それは私たち日本語世代の次世代である子孫たちでさえも猛勉強することによってはじめて理解できるものです。

台湾人が日本統治時代について語る場合、つねに彼らが戦後経験した国民党独裁政治あるいはもうひとつの殖民統治と比較をして語ります。良し悪しというものは、比較できたからこそ、ある程度の客観性がもてるのです。これはポストコロニアル期の台湾被殖民者の「民衆の比較政治学」と私はみていますが、台湾人の日本統治に対する評価は、戦後彼らが国民党政権の下でどのような経験をしたのかをきちんと理解しない限り、彼らの声を正しく報道することができないと思います。また一言で日本統治と言っても台湾では半世紀に及び、統治初期は幾つもの武装的抗日運動が起こったとはいえ、台湾総督府もさまざまな試行錯誤を重ね、台湾の「殖民される側」と弁証的な競合関係にあつて、あの時代を歩んでいきました。いうまでもなく第二次世界大戦では台湾人も日本国民として、運命を共にしました。このような時期によって、また違った統治策によって、台湾のひとびとの反応も大きく違いがみられる歴史を、日本統治時代として大雑把にまとめて述べることは、やはり事実を誤解して認識し、放送することになります。

台湾では、ようやくいままで外省人によって「代行」されていた日本観がすでに解放された状態になった今日ですが、また今度、NHK 放送によってその声が抑えられるとは、呆れてしまいました。私の知っている日本の学界では、台湾の戒厳令解除につれて、この20年すでに優れた台湾統治史の研究結果がたくさん出ています。台湾を専門としていないフランス学者の説をわざわざ取り上げる必要もありません。そして台湾にいる私をもっとも憂慮すべきだと思っているのは、NHK 放送を信用してきている日本の方々が、台湾のひとびとの心情とますます遠ざかっていくことです。現実問題として日本と中華民国が国交を断絶してやがて40年になります。日本は中華民国政権の代わりに、中華人民共和国と国交を結びました。そのため、過去50年間「帝国臣民」として統治された台湾のひとびとがたいへん不利な状況に置かれていることを、戦後生まれの日本の方はあまり知らないと思います。日本とこの二つの中国の間との恩讐関係は、もと植民地の人々との関係とは全く性質の違うものです。にもかかわらず、それを見極める能力もなく、実際に台湾のひとびとの国際社会での利益を犠牲にしたことが、何の罪もない台湾のひとびとが戦後日本の「捨てたきり」ぶりを批判している原因です。

このような厳しい国際状況のなかで、次世代の台湾のひとびとが如何に日本とふたび付き合えるのか、私は台湾の日本語世代の出した声にとっても重要なメッセージが含まれていると思います。プラスもマイナスもそれなりに彼らの心の整理が付いています。問題はこちらが聞く耳をもっているかどうかです。日本語世代が終わろうとしている今日は、その声が遺言みたいなものにも聞こえます。聞き逃したら再び聞くことのできない遺言ですが、耳を澄ましてきちんと聞いてあげることがせめての慰めだと思います。その重さを、残念ながら今回のNHK 放送側は理解していないと思います。

黄智慧（台湾 中央研究院民族学研究所）

----- 以上 -----